

研 究 社

世 界 言 語 概 說

下 卷

文 學 博 士 市 河 三 喜

文 學 博 士 服 部 四 郎

共 編

★ 新 書 100 冊 ★



KENKYUSHA

〈 検印省略 〉

世界言語概説 下巻

昭和 30 年 5 月 10 日 初版発行

昭和 61 年 7 月 30 日 第12版発行

主 幹 者	市 河 三 喜 服 部 四 郎
発 行 者	植 田 虎 雄
印 刷 所	研究社印刷株式会社

発行所 研究社出版株式会社

〒101
東京都千代田区神田駿河台 2-9
振替口座 東京 7-83761 番

ISBN 4-327-39402-5

は し が き

「世界言語概説」の出版を企畫したのは昭和十七年まだ戦争のさ中であつた。世界における諸言語のうち主なるものを取り上げ、その構造・歴史・分布等の状態を精確に記述して學徒に提供したいといふ意圖のもとに始められたのであつた。爾來執筆者は戦争中また終戦後の惡條件と戦ひつつ最近の資料によつて解説をまとめ、出版者も同様諸種の窮屈なる事情のもとに全力を盡して、この前例を見ない困難な事業の遂行に當り、遂に十年の後昭和二十七年に至り上巻の出版を見たのである。

當時既に下巻の原稿も一部分出來上つて居たが、たまたま編者服部四郎博士が Michigan 大學の招きに應じて渡米され、一頓挫を來した上に、執筆者の間にも多少の異動があり、また初めは舊制高等學校學生程度の讀者を目當に啓蒙的に叙述するといふ趣旨であつたものが、だんだん執筆者の間にも慾が出て、折角これだけの大きな企畫を完成しようといふならば更に一步を進めて、わが國言語學の最高の水準を示すやうな論文を書いて見たいといふことになり、殊に下巻に含まれる諸言語即ちアジア諸地域の言語の如く、歐米の學者の間にもまだ十分に研究されて居ない言語を取扱ふ場合において、この努力はむしろ極めて有意義であると考へられるので、編者としてもこれに共鳴し協力することとなり、執筆者も幾度か稿を改め、また校正に當つても何度か筆を加へて、そのため印刷の進行も停滯したことも再度ならす生じた。しかしすべては學問の嚴しい現實の前に忍ばなければならない犠牲であつて、出版者もよく編者の苛烈と思はれるほどの要求に應じ、幾度か組版を改めるの餘儀なきに至つたやうなこともあつた。かうして遂に今日、ここにこのやうな立派な書物が出來上つたことは學界のためまことに慶賀に堪へない。

個々の論文についての詳細は服部博士の「あとがき」に譲るが、

出来上つた論文の一つ一つを巨細に吟味検討して足らざるを補ひ、ある部分は訂正加筆を執筆者にお願いして、本書を少しでもよりよくするために、稀に見る良心的な監修の任に當られた服部博士の努力に對しては讀者と共に感謝せざるを得ない。また出版社も當初豫期しなかつた數々の難關に遭遇して少しもひるまず、400ページ餘に亙る紙數の増加をも顧慮するところなく、もつばら學界に寄與するの熱意をもつて事に當つたことは關係者一同と共に感謝の意を表するところである。

この書の出版によつてわが國における言語學界及び國語學界に大きな刺戟を與へ貢獻をもたらすことを得れば、それはこの事業の遂行に對して惜しみなく協力された多くの専門學者と、終始良心的に責任をもつて原稿を校閲補筆された服部四郎博士の努力の賜物であり、また長い間編集と校正を助け、また索引作製の仕事に獻身的に盡力された東大言語學研究室の諸兄に對しても感謝しなければならない。

最後に執筆者の一人金城朝永君は琉球語の一部を分擔されたのであるが、不幸にして去る三月十日この書の出版を見ずして、前途有爲の身をもつて病のために逝去された。ここに謹んで哀悼の意を表する。

昭和三十年三月

市 河 三 喜

凡 例

1. 記號の説明。

/ / に入れたのは音韻記號。

[] に入れたのは音聲記號。おほむね國際音聲字母を用ゐる。

例: p. 155, /kaado/ [ka:do] (カード)

() は色々の意味に用ゐる。

a) 術語の對照: p. 35, 膠着説 (Agglutinationstheorie);

p. 40, analytic (分析的)

b) 外國語固有名讀み方: p. 6, Dauzat, A (ドーザ)

c) 説明: p. 52 参照。

d) 「その部分を略してもよい」の意, など: 索引の凡例参照。

◀ ▶ それに先行する形式などの表はす “意味”: p. 61, Bruder ◀兄▶

“ ” 「いはゆる」の意に屢々用ゐる。例: p. 80, “音韻法則”

~ a) 共時的交替: p. 332, d ~ c

b) 同じ部分を繰返す代りに用ゐる。例: p. 180, ~ナ = シズカナ・元氣ナ

但し, 共時的交替は / で示すこともある。例: p. 385, -gwa / -'wa

→ 共時的交替或いは替變の方向: p. 260, t → d, c → z; p. 380, sor + namu → so-namu; p. 656, *hajót* ← *hajó*

→ 通時的變化の方向: p. 335, クエタリ → ケタリ

> 借用の方向(開いてゐる方からとがつてゐる方へ): p. 570, 蒙古語 lama < チベット語 bla-ma

* 文獻的に實證されない再構形: p. 63, *es-mi; p. 71, *sakante

|| 對應: p. 62, ゴート語 *itan* ◀食ふ▶ || 古期英語 *etan*

- 「他の形式と接合または結合する」の意。例: p. 336, 参照。

・ ローマ字書き字面における - (ハイフン) に相當する所に用ゐる。

例: p. 102, ウラル=アルタイ語族

この記號の用ゐられてゐる所では, ・ (中黒丸) は同格的に並べられた單語の間に附せられるが, ・ を ・ と同じ意味に用ゐた場所もある。例: p. 542, アガ・ブリヤート

2. 脚註の番號は () に入れた算用數字で示し, 原則として各頁ごとに新しく始まる。() に入れた漢數字は, その言語の記述全體の末尾につけた監修者註の番號。

3. 外國人著者名は原則としてローマ字で表記し, 論文ごとに主として初出の場合だけ片假名で姓の讀み方を示す。

目次

總 說

服部四郎

I.	言語の數について	...	...	...	...	...	...	...	...	3
II.	言語の形態的分類と言語發達論	...	...	...	...	...	...	...	...	21
III.	比較方法の發達	...	...	...	...	...	...	...	...	47
IV.	方法の反省と言語年代學	...	...	...	...	...	...	...	...	73
V.	世界の諸言語	...	...	...	...	...	...	...	...	101
	參考文獻	...	...	...	...	...	...	...	...	143
	引用書略稱表	...	...	...	...	...	...	...	...	147

日本語

服部四郎

金田一春彦

林 大

大野 晋

[illegible]

琉球語

金城朝永

服部四郎

[illegible]

[illegible][illegible][illegible]

蒙古語

野村正良

I.	分布地域と人口...	539
II.	方言と共通語...	543
III.	文字と音韻...	550
IV.	形態...	559
V.	文の構造...	564
VI.	語彙...	569
VII.	歴史...	575
VIII.	系統...	579
	参考書...	588
	監修者註...	590

トルコ語

柴田武

I.	分布地域...	593
II.	方言...	594
III.	音...	598
IV.	文字...	603
V.	形態...	606
VI.	文の構造...	619
VII.	語彙...	621
VIII.	歴史...	624
IX.	系統...	630
	附. 参考書...	632
	監修者註...	635

ハンガリー語

徳永康元

I.	分布...	639
II.	系統...	640

III.	文獻の歴史...	642
IV.	借用語彙の歴史...	645
V.	音論 (附. 文字)...	648
VI.	形態論...	653
VII.	文 例...	676
	参考文献	679

フィンランド語 尾 崎 義

I.	地域・人種・人口	691
II.	バルト＝フィン語系諸言語	691
III.	フィン語方言	692
IV.	他言語との接觸——借用語	692
V.	フィン語文法概要	694
	主要参考文献	722

アイヌ語 金田一京助

I.	緒 論...	727
II.	音 韻...	729
III.	語 法...	732
IV.	文 論...	747
V.	日本語とアイヌ語	747
	文 例...	749
	参考書...	749

ギリヤーク語 服 部 健

I.	序 説...	753
II.	音 韻...	755
III.	語 法...	760
IV.	文 例...	771

VII. 系 統...	903
参考書目	906

ビルマ語

矢崎源九郎

I. ビルマ語の行はれる地域・人種	913
II. 方言・標準語	914
III. 音 韻	916
IV. 文 字	920
V. 文 法	925
VI. 語 彙	937
VII. 系 統	939
参考書	948

チベット語

渡邊照宏 北村 甫

I. チベット語の系統	953
II. 分布地域・人種・生活・文化	955
III. 音 韻	958
IV. 文 字	977
V. 文 法	983
VI. 語 彙	989
VII. 文 例	991
VIII. チベット文獻概観	993
参考書	997

マライ・ポリネシア諸語

泉井久之助

I. はしがき——ミクロネシア	1003
II. マライ・ポリネシア諸語分布範圍の定立	1007
III. マライ・ポリネシア諸言語とその三語派	1014
IV. 三語派の區別の比較言語學的根據	1023

V.	マライ=ポリネシア諸語の音韻		1036
VI.	マライ=ポリネシア諸語の語詞構成		1046
VII.	マライ=ポリネシア諸語の文法體系とその種々性		1060
VIII.	文 例...		1080
	参考文献		1091

ヘブライ語

前 田 護 郎

I.	序説 (ヘブライ語の現代的意義)		1097
II.	ヘブライ語の名稱		1099
III.	ヘブライ語の成立		1102
IV.	ヘブライ語の言語學的位置		1104
V.	ヘブライ文字		1117
VI.	ヘブライ語の文法的性格...		1123
VII.	ヘブライ人の言語観...		1137
VIII.	聖書研究とヘブライ語		1143
IX.	近代ヘブライ語への推移...		1146
X.	ヘブライ語研究史要...		1148
	参考文献		1150

アラビア語

井 筒 俊 彦

I.	アラビア語といふ名稱		1157
II.	セム語比較言語學		1164
III.	共通セム語とアラビア語...		1177
IV.	セム語族の内的構成...		1199
V.	南北アラビア語...		1212
	参考文献 (各章末)		

	凡 例... ..	I225
I.	言語名・民族名索引... ..	I229
II.	事項索引	I258
III.	著者名索引... ..	I286
	附. 本書引用邦文・歐文雑誌名一覧表... ..	I294
IV.	ローマ字・ロシア字索引... ..	I299
 あとがき 服部四郎 I331		

總 說

服 部 四 郎

目 次

	ページ
I. 言語数のについて	3
1. 言語と人類 (3); 2. 言語の数 (4); 3. 通じない時は「異なる言語」(4); 4. 言語境界線の有る時 (4); 5. 共通語を異にする時 (6); 6. 「國語」(9); 7. 共通語・標準語 (10); 8. 國家と國語 (11); 9. “言語の数”をきめる困難と「言語」の内容 (13); 10. 階級方言・特殊語・隱語 (14); 11. 學者語・國際語 (16); 12. 混合語 (16); 13. 言語の死滅と復活 (17); 14. 世界の言語の数 (18)	
II. 言語の形態的分類と言語發達論	21
1. 言語の構造的分類 (21); 2. F. von Schlegel (21); 3. A. W. von Schlegel (22); 4. F. Bopp (22); 5. J. Grimm (23); 6. W. von Humboldt (23); 7. A. Fr. Pott (23); 8. A. Schleicher (24); 9. F. Max Müller (25); 10. W. D. Whitney (26); 11. H. Steinthal (27); 12. G. Oppert (29); 13. O. Jespersen (30); 14. G. von der Gabelentz (35); 15. W. Schmidt (36); 16. F. N. Finck (37); 17. T. G. Tucker (38); 18. E. Sapir (39); 19. 最近の傾向 (45)	
III. 比較方法の發達... ..	47
1. 言語は時代的に變化する (47); 2. 言語變化の原因 (48); 3. 「語族」(51); 4. 言語の起源に關する臆説 (53); 5. G. W. Leibniz (55); 6. Sir W. Jones (56); 7. F. von Schlegel (57); 8. F. Bopp (58); 9. R. K. Rask (59); 10. J. Grimm (60); 11. A. Schleicher (62); 12. 1870 年代の諸發見 (65); 13. その歸結 (68); 14. “音韻法則” (69); 15. 類推 (70); 16. 借用 (72)	
IV. 方法の反省と言語年代學... ..	73
1. 方法の反省 (73); 2. F. de Saussure (74); 3. A. Meillet (76); 4. 音韻 (79); 5. 形態 (81); 6. 語彙 (83); 7. 親族關係の證據とその證明 (87); 8. 「新言語學派」(88); 9. アメリカインディアン諸言語の比較研究 (91); 10. 言語年代學 (94)	
V. 世界の諸言語	101
参考文献	000

總 說

I. 言語の數について

Ⅰ. 言語は人類を他の動物から區別する目印の最も大切なものの一つである。人類である以上、如何に“未開野蠻”とされる種族でも言語を持たぬものはない⁽¹⁾。一方、如何に高等な類人猿でも人類のそののやうな言語は有しない。啼き聲などで眼前の事物について或種の傳達行動を行ふことはあるが、音聲による記號の體系である言語を有しないから、過去の經驗や未來の豫定について傳達し合ふことができない。また人類の言語を習得する能力もない⁽²⁾。

(1) いはゆる矮小人種は大抵隣接の身長の高い人種の言語を話してゐるから、自己の固有の言語は有しなかつたらしいといふ臆説に對して、W. Schmidt (シュミット) は次のやうに反駁してゐる (*Die Sprachfamilien und Sprachenkreise der Erde*, Heidelberg, 1926. [本稿では、以下 *SS E* と略稱] pp. 6-12)。即ち、フィリッピン人の矮小黒人ネグリート人 (Negrito) の言語は確かに南島語族 (Austronesisch) 系だけれど隣接のタガログ語やビサヤ語とは著しく異なり、かつ或種の夜の儀式で歌はれる歌謡には南島語族の専門家達には全然わからない言葉が含まれて居り、それが彼らの固有語と關係があるらしいと推定されること；マライ半島のセマング人 (Semang) の言語は南亞語族 (Austroasiatisch) 系と認められるがこの人種の固有語のなごりであると考へ得る要素を含んでゐること；アフリカ中部地方の矮小人種の言語はバントゥー語族系ではあるけれどもやはり近隣のバントゥー語とは異なり却つて遠くに住む民族の言語に似て居り、且つ發音に認められる特徴は固有語のなごりではないかと疑はれるふしがあること；アンダマン諸島の矮小人種の言語アンダマン語 (Andamanese) は全く獨特の言語であるばかりでなくその構造が甚だ複雑で、矮小人種の知能が低いといふ臆測に對する反證となること；アフリカの矮人ブッシュマンの言語は hottentott 語と明かに同系であるが後者より單純な發達段階にとどまつてゐると考へられること；その他の多くの原始民族も獨特の固有語を有すること；などをあげて、人類の如何なる種族も立派な言語を有するといふ主張を支持してゐる。しかし、たとへ、矮小人種の言語が隣接の民族のそれを取り入れたものであることが十分明かとなつたとしても、それらの人種が他民族の言語を習得する能力を有したといふ事實は注目すべく、人類以外の動物が人類の言語を習得し得ないのとは根本的に異なる。

(2) 杉浦健一：「人類學」，東京 同文館，1951 年 5 月。pp. 14, 16, 19, 202.

Hayakawa, S. I.: *Language in Action*. New York, 1948. p. 19 によると、動物は食物や指導權のために互いに闘争するけれども、人間のやうに、食物や指導權を代表するもの (貨幣・勳章など) のために闘争することではなく、動物にとつては、或物が他の物を表はすといふ關係は非常に原初的な形においてしか存在しないらしい、といふ。